

モリスと賢治、そして大内先生

田中 史郎

大内秀明先生から実に多くのことを学んだ。W.モリスと宮沢賢治にかんしても言うまでもない。賢治の「芸術をもてあの灰色の労働を燃やせ。」(『農民芸術概論綱要』1926年)は、モリスの"Art is man's expression of his joy in labour." (芸術は労働における人間の喜びの表現である)を受けたものだという理解も、先生から学んだものの一つだ(大内秀明『賢治とモリスの環境芸術』時潮社、2007年)。ちなみに、本協会 Web ページのバナーにはこのフレーズが掲げられている。

欧米においては、A.スミスを持ち出すまでもなく、古くから労働の本質は'toil and trouble' (苦勞と勞苦) と把握されてきた。その系譜にある一つの作品がアメリカの社会主義者 E.ベラミー『顧みれば』("Looking Backward"1888年)である。そこでは煩勞である労働をできる限り効率的に組織的に利用する社会が一つの理想として描かれている。今日の言葉でいえば、ハイテクを利用した徹底的な計画に基づく効率的な経済のありようが来たるべき未来社会像とされたのだ。

それに猛反発したモリスが執筆したのが、『ユートピアだより』("News from Nowhere". 1890年1月から11月まで、『コモンウィール』に連載。その後、1891年に単行本として刊行)である。モリスは、労働そのものの意義を問い、芸術を労働の表現であると把握したと考えられる。先のモリスの言葉はそれを端的に現している。その背景には、K.マルクスの言葉にある、労働が「単に生活の手段でなく、第一の生活の要求に」(マルクス『ゴータ綱領批判』) なるような未来社会のイメージや、モリス自身の関わった実践的な芸術活動や社会運動があると思われる。

先に引用した賢治『農民芸術概論綱要』の文言に添えられた「メモ」には、さらに「労働は常に苦痛ではない 労働は常に創造である 創造は常に享樂である 人間を犠牲にして生産に仕ふるとき苦痛となる」という記述がみられるという。

極めて興味深い。そして、これら「モリスと賢治」をめぐる研究に先鞭をつけた大内先生から学ぶべきことはまだまだ多い。先生の「宮沢賢治賞奨励賞」受賞を祝して。

(『セングードつうしん』第8号、2023年11月)